

猪 牛 三ツ目小僧 魚 鯨 お 狐 盜 闇 佛 お  
 ば げ  
 面 賊 魔 様

## フレীবールの思想

フレッツチャーに據る

— — — — — — — — — 五六

不 鯛 轆 海 蛇 猫 獅 鱷 狼 犬  
 明 の 死 老 子  
 頭 人

四 — — — 三 三 三 — 四 二

### ▲萬有神論▼

自然が可見的の靈であり、靈が不可見的自然であるといふこと、事物は靈を實在とせるもの、外

### 紹 介 子

貌に過ぎないこと。而してそれが爲めに事物は個人の心靈と同質であること。すべての自然は生活して居り、而して無窮の生産力に於てその生活を表現して居ること。萬物は神と共に一體を成して居ること、而してこの意味に於て萬物が靈的であること。人間はこの本質的の渾一を理解することに於て満足を見出さうとして居ること——以上がフレーベルの哲學の本質的諸相であります、而して是等は漠然としては居りますが、シエリングやフィヒテの哲學を現して居るのであります。

フレーベルが是等の哲學説を味ふ場合にいつも嚴正な形而上學的な、又論理的な批判を加へたか何うかといふことは頗る疑はしいものであらうと思ひます、彼の心は、はつきりとした直截な思索を彼にまで來らしむことを許すべく、餘りに夢み勝ちであり、又餘りに神秘的でありました。

晉に哲學に於てのみならず、あらゆる問題に關しての思考力を嚴格に訓練してなかつたこと、及

び長い間淋しい自然を、詩人の心持を以て眺め暮してゐたことが、フレーベルをして、上の如き思索を不可能ならしめたことは明かであります。兎に角抽象的な概括的な、而して又朦朧たる物言ひの中に満足を見出す彼の傾向は、不確定な記述を來たさしめたばかりでなく、神が萬物に對して好意と愛情とを持つて居ること、及びそれがために人間性には價値があるといふ思想を軸として回轉する無晶形の感情の一體を表示して居ります。

彼の思想がその本質及び包意に於て屢々萬有神論的であるといふことをフレーベル自身は認めて居らないのであります——フレーベルは萬有神論を嫌うて居たのでありますから。尤もフレーベルの拒否して居た萬有神論といふのは、最も生硬な形式を執つて居るもので、自然の中に神の身體を認めるといふやうな萬有神論であります。

もつとリファインされた萬有神論の形式、即ち萬物の現實性と神性とを一致せしめ、すべてのも

の——勿論この中には悪をも含む——に對して神の好意と本質的に結合することを要求するところの萬有神論が彼の全教育の底に横つて居るのであります。

### ▲ペスタロッチ ▼

フレーベルは以上の諸影響の他に、ペスタロッチの影響に負ふ所が大であります、多分彼が自身で認めてゐた以上にこの影響は大なるものでありませう。フレーベルの教育原理の萌芽は大抵これをペスタロッチの教育原理の中に求めることの出来るを見ても、ペスタロッチが如何にフレーベルに感化影響を與へてゐたか分るでありませう、教育的過程とは個人がその周圍に對して行ふところの繼續的反作用であるといふ基礎的公理もフレーベルはペスタロッチから受取つて居るのであります。

ペスタロッチの初めて用ゐた「外なるものを内

へ、内なるものを外へ」「the outer inner, and the inner outer」といふ概括的な、不確定な語句はその意義が曖昧模糊たるにも拘らず、フレーベルの學徒の合言葉の如くに用ゐられて來て居るのであります。

彼はフランクフルトのグルーネルス、モデル、スクールに教鞭を取つた頃のことを書いたもの、中に次のやうなことを言つて居るのであります。

「教育、教授の合言葉はペスタロッチであつた、この合言葉は直ちに私に強く印象せられたのである、何故ならばグルーネルも、他のもう一人の教師もペスタロッチのお弟子であつたからであるグルーネルはその頃既にペスタロッチの教授法に關して一部の著書を公にしてゐた位であつた、ペスタロッチの名前は益々私を感動せしめた、何故ならばそれは力及びインスピレーションの源泉として、風の如くに目に入らぬものではあつたが、私の發達と自修とに資する所が多かつたからであ

る——然る時にベスタロッチに關するあらゆる事柄が私の上に力強く働いたといふことは少しも不思議はないであらう——。間もなく私は、斯くの如く多く考へ又行つたこの人の生涯を知り、著作を讀まうと決心したのである」

### ▲イベルドンへ

乃で彼は一八〇五年の夏にイベルトンを訪れて彼地に半月ばかり滞在しました、彼はこのことに就て次の如く言つて居ります。

「その頃の氣分で、もつと長く彼地に留つてゐたとしたならば、私はそれを欲してゐたのではあるが、私の心情と心意と心靈とは直に破られて了つたに違ひないことを私は感ずる、丁度その頃イベルトンの生活は内部的、外部的の兩方面に於て、強い感激と烈しい努力とに依つて著しかつたのである」。

彼はこのイベルドン訪問の記事の中に尙斯うい

ふことを言つて居ります。

「私は尙學理にも教授の實際にも暗かつた、私は未だその頃學校時代の回想の上に生活して居たためにベスタロッチの系統の細部や全體の組織を看取することが出来なかつた」

而かも彼は批評の眼を閉ぢせられるまでに勇氣を失つて了ひはしませんでした。彼には、全體の組織の相互關係が實際には明確な意識の中にも外部の表現の中にも存在して居ないやうに見えたのであります、而してその結果として彼はその見聞せるところに依り、勇氣を得るが早いか沮喪して了ひ、刺戟を受けたと同時に迷つて了つたのであります。

### ▲善い點、悪い點

彼はこの時の印象を次のやうに述べて居ります「私がベスタロッチの許にしばらく滞在して居た間に集め得た結果は、明かなよく整へられた計畫

に基いて行はれて居る大きな學校の教授振りを見たといふことであつた、あの種の計畫は私も尙且之を有して居るのである、私の見る所を以てすればベスタロッチの計畫は多くの優れた點を含んで居ると同時に多くの不便な點をも亦含んで居ると思ふ、すべての組に於て多くの生徒が同時に同一の主題に就て教授せられるといふことが私には特に面白く感ぜられた、各の組に對して教授の主題が定められてゐた、けれども生徒はその能力に應じて各の主題に對して分配せられるのである、それ故に各の組の生徒の顔觸は主題に依つて異なるのである、これは非常に便利だと思つて私はその後以來、この式を採用して居り、今でも撤廢しやうとは思つて居ないのである」

「ベスタロッチの計畫の不便な點といふのは、これは私も今自身で何うしたらよからうかと頻りに模索して居る所なのであるが、計畫の不完全と一向きであるといふことである。完全な調和

的な人の發達に缺くべからざる教授の二三の主題があまり顧みられず、繼子扱ひにされ、十分に手が盡されてゐないやうに私には思はれる」

フレーベルはこれから重要な主題に就て、その細部を検し、その教授法を批評して居ります、而てその教授法が一般に教權を強ゆるやうな調子であつて、生徒の獨創性に訴ふることの尠いことを擧げて居ります。

### ▲教育の目的

その後フレーベルがグルーネルの學校を去つて三人の兄弟の家庭教師となつてゐた頃までの數年間彼の心の中に醸されてゐた問題は「初等教育とは何であるか、ベスタロッチの方法の眞の意義は何であるか、概括して教育の目的は何であるか」、彼はこの最後の問ひに答へて次の如く言つて居ります。

「私は次の觀察點から出發した、人は事物の世界

に住む、事物は人を愛す、面して人は事物を愛したいと望んで居る、乃で人は事物の性質や本質を知らなければならぬ、又事物と事物との関係や事物と人との関係を知らなければならぬ。事物は形式(形式の教義)と壯大(壯大の教義)と多様(數の教義)とを持つて居る。外的世界といふ言葉によつて私はたい自然だけを意味してゐた。私は藝術的の産物及び人間の他の産物が私にとつて存在しない自然の中に大變長く住んで居た、それ故に初等教育の手段の中に人間の仕事の斯る結果を取込

## 行啓の日

皇后陛下には十月二十三日午前九時御出門、東京女子高等師範學校へ行啓、その午後に於て、特に附屬幼稚園に臨御、幼兒保育の實況を御覽せられた。此の一篇は、その有り難き日の、たいあらましの覚えがきに過ぎぬ。

幼稚園の門の内の大銀杏樹には、秋の日が其の豊滿なる誇りを見せて居る。保育室の窓下に咲き

むやうに私を教育するまでには長い間の努力を要したのである……、私が「外的世界」といふ言葉に人間の産物の全體を加へた時にそれは私の内的及び外的の水平線の一大擴張であつた……。その頃私は「すべてが渾一である、すべてが渾一から出發して行く、すべてが渾一を目掛けて努力し進んで行く、而して又渾一に歸つて行く。この渾一を成して努力し、渾一を求めて努力して行くのが人間生活に種々相を生せしめる所以である」と考へてゐた。

列ねた菊の花壇には、秋の日が其の高雅なる彩りを飾つて居る。本校の運動場から小學校の運動場を経て、春には紫の雲たなびく藤棚の下を、砂場に添ふて、幔幕嚴かなる幼稚園正面入口まで、箒目のあとも清らにしつらへたる盛砂の御歩道に